

座長：宮本千津子（東京医療保健大学千葉看護学部 副学長・学部長）
河嶋 知子（JCHO本部 企画経営部 医療担当副部長（看護担当））

SP1-1 「広いフィールド観」をもつ 看護人材の育成をめざして

東京医療保健大学千葉看護学部 副学長・学部長
宮本 千津子

東京医療保健大学は2005年に開学した医療系の大学です。特徴としては、全学部がそれぞれしっかりとした病院との協力関係のなか実践に貢献できる医療職者を養成しようとしていることがあげられます。2018年度に貴機構との協定を結び、千葉県船橋市の貴機構研修センター（元）に千葉看護学部を新たに設置いたしました。

開設にあたって、貴機構との連携の機会を得たこと、および船橋市という地域性において実践に貢献できる人材像とはどういったものかを検討しました。その結果、地域連携が推進される時代にあつて、病院・地域のどこにあつても人々が看護サービスに期待する機能を果たすことができる「広いフィールド観」をもった医療人であろうと考えるに至りました。

このためカリキュラムは、早期から看護が活躍する様々な現場に触れること、座学と実習を交互に繰り返し現場的な学び方を身に付けること、一方で次世代を担う基盤として教養教育を充実させること、社会の変化に呼应し創造していけるよう答えのない課題にチームで取り組むこと、人々や地域の健康課題に対し各種資源をつないで解決していくこと、等を重視し作成・実施しています。

この際、基礎科目では貴機構の医師の先生方に講師としてご協力をいただき、また、実習では看護部を始めとする現場と大学とが互いの強みを活かしあえるよう準備し実施しました。他にも、先進的な地域連携を学ぶ機会として実習病院以外の見学もさせていただきました。このように、所属に関わらず同じ医療・看護を担う者として協力し合う姿を学生に見せることが、多職種・多機関が連携することを当然と思い、取り組める看護師の育成に必須であると考えています。

さらにその延長線上として、2021年の開設をめざして大学院準備を始めました。多職種チームにおいて求められる看護の機能を追求・実践する推進者となる人材を育成すべく、挑戦していきたいと考えています。

SP1-2 東京医療保健大学 千葉看護学部における、 臨床現場との協働の教育の実際

東京医療保健大学千葉看護学部看護学科 講師
安藤 瑞穂

本学部は2018年度に開設し、初年度から貴機構5病院の協力を得て演習・実習を行っています。

1年前期の「看護学概論」では、学生が「広いフィールド観」を育むことをねらい、一般病棟の他にICU、健康管理センター、地域包括ケア病棟、地域連携室、外来などにて2日間の見学演習を行わせていただきました。

1年後期の「基礎看護援助実習I」では、変化する時代に看護師に求められる能力の育成をめざし、従来までの実習スタイルを大きく変更しています。本実習は、臨地実習（3日間）の間に学内実習を配置した“五月雨式”のスタイルをとっています。学生は臨地においてバイタルサイン測定と清潔ケアを看護師と実施しながら自らの実践を評価し、次の目標を立て、学内実習で目標達成のための練習を行い、次の臨地実習に臨むことを繰り返します。この実習方法により、学生はケア方法を試行錯誤し、主体的に実習に臨むことができます。

しかし、新たなスタイルでの実習であり、高い成果を出すには臨床現場との協働が必須です。本実習においては、実習目標を臨地実習指導者、学生、教員間で共通認識するために「学習内容別評価基準表（ループリック）」を使用しています。昨年度は、この使用方法や具体的な実習時の指導を共有するために、各病院においてワークショップを開催いたしました。

本シンポジウムでは、「基礎看護援助実習I」の内容および、臨床現場との協働の実際を発表いたします。

座長：宮本千津子（東京医療保健大学千葉看護学部 副学長・学部長）
河嶋 知子（JCHO本部 企画経営部 医療担当副部長（看護担当））

SP1-3 当院における
臨地実習の現状と今後の課題

JCHO 船橋中央病院 副看護部長
石田 智恵子

当院看護部の教育目的は「豊かな心と実践力を養う」である。豊かな心とは、「患者（家族を含めて）を思う心、仲間を信じる心、自分を認める心、社会への関心」という意味が込められている。看護専門職として質の高い看護を提供するためには、知識や技術だけではなく、このような心の醸成も重要と考える。そして、「教育」は「共育」という言葉で表し、皆が共に育ち合う意識を持って看護の現場に立っている。これは継続教育だけではなく、学生指導においても同様である。

当院の附属看護専門学校は今年度で閉校になるが、それに伴い、他校からの看護実習を受け入れる数は増加し、現在附属以外に9つの学校を受け入れている。内訳は大学5、通信制2、高等学校（5年一貫制）1、専門学校1である。それぞれ学校の実習要項も違うため、現場の臨地実習指導者は大変であるが、教える側も教えられる側も「共に育む」という考えを持って、前向きに指導を行っている。先達者が作り上げてきた当院の教育体制は「共育」という風土が根付いてきていると実感している。

臨地実習の中で大切にしたいことは、学生に様々なことを経験させ、経験したことを意味づけることであると考え。コルプの4段階の体験学習サイクル（具体的な体験→観察・振り返り・復習→概念化・一般化→再試行を検討）にもあるように、体験を振り返り、学びに変える支援ができる指導者の育成が必要である。

これまで附属の看護学校と病院間の連携として、臨地実習指導者会議を毎月1回行い、先生方と臨地実習指導者間で情報共有と様々な課題解決に向けて検討を行ってきた。今後も社会に求められる優れた看護実践能力を身につけた看護師となるよう育成していくために、さらに工夫しながら、教育との連携を図っていくことが課題であると考え。

SP1-4 JCHO 東京高輪病院での
取り組みと課題

JCHO 東京高輪病院 看護師長
原田 麗子

当院では、現在実習病院として3校の看護学校、大学の受入をしている。院内での実習指導の他に学内での講師としての役割も担い教育の場面に携わっている。

院内での実習指導では各学校の教育方針、実習方法の確認、学生の特性を把握し、一貫した指導が出来るよう環境を整えることに努めている。委員会活動の中で臨床指導者との情報共有、ディスカッションを行うことで、より良い環境で学生が実習に臨める様に努めているが、各学校の臨床指導者への求める役割の違いから、臨床実習指導者への負担、学生への指導方法、教師との連携について、通年を通して学校との協議を行っている。

近年、学生の年齢、社会的背景が多様化する中、学生の特性に合わせた指導する中でも指導の場面で難渋するケースもみられる。在院日数が短期化する現在3週間の実習期間で継続して同じ患者を受け持つ事ができない環境の中、学習が追いつかず看護展開に難渋するケースも少なくない。指導者への支援と、より良い実習環境を整える取り組みとして、学校からのフィードバックの他に、委員会活動の中で、効果的な関わりや、困窮した場面での事例検討を行い学生への指導力の向上に繋げている。また、委員会内で臨床実習指導者研修に参加した者からの伝達講習を行い指導者全体の指導力の向上にも努めている。

今後の課題として、学生を受け入れる中で病棟での情報共有は出来ているが、実際臨床実習指導者だけが学生指導に関わっている現状がある。病棟全体で学生指導に取り組む事ができる体制、風土を作る事で実習環境の充実、教育体制の構築に繋がるのではないかと考える。